

「平静の心 — オスラー博士講演集」

聖路加看護大学学長 日野原 重 明 訳
 聖路加看護大学教授 仁 木 久 恵

浜松医科大学学長

吉 利 和

この本の初めに、訳者の日野原先生が書いておられるように、この本をいきなり初めから読み出すと、なかなか難しくて、近寄りがたいという感じがする。そこで私も、先生のお勧めのように、巻末に載っている先生の一文「ウィリアム・オスラー卿の生涯とその業績ならびに思想について」から読み始め、Oslerの生涯、その人間、業績などの概略を頭に入れてから、本文に入ることにした。この際、日野原先生が日本医学教育学会で、多数のスライドを使って話されたOslerの生涯と思想が大いに役に立った。

私の学生時代から医局時代は、日本の医学界はドイツ医学全盛時代で、内科の本と言えば、Mering, Brugsch, Strumpel, そして新しいBergmannの本を専ら学んでいた。しかし私の恩師柿沼先生は、Bergmannの教科書の優秀性を主張されながら、他方ドイツ流の体系的、理論的医学のみでは、医師としては物足りないと言われ、当時はあまり水準が高いと思われなかったアメリカのものに誠に捨てがたいいい面があると言われ、OslerのPrinciples and Practice of Medicineという本の名を挙げられた。日野原先生の文によると、この本の初版は1892年であるが、私が早速入手したものが何年版であったのか失念した。1949年第16版が出たというから、私の読んだのは、これに近いものであっ

ただろう。戦時中上海のものも入手して、粗末な製本に苦しみながら読んだ記憶がある。

この内科書は、ドイツのものとどこが違うのかに大変興味を持った。私の感じでは、臨床像が中心となっておりながら、それが病理と密接に関連づけられている点であった。事実Oslerは自ら診察し、死亡した患者の遺体を自ら剖検し、その所見と、生前の臨床像とを対比しながら、学生や若い医師に実物教育をしたようである。これは実にいい教育法であり、今日では剖検までいかないうちから、検査所見、その他を臨床像に合わせて調べ、その経過を追うということは、臨床修練の最もいい方法である。

私はアメリカで勉強したことはないのですが、本場の雰囲気を知らないが、日本でこれまで行われた教育法には、大きい教訓を与えてくれるものが多いようである。

Osler博士はカナダに生まれ、モントリオールのマギル大学を卒業、その大学で病理と内科をやられ、後、ペンシルバニア大学に移り、この間に心内膜炎の際のオスラー結節を記載している。

後に1889年アメリカに招聘されてジョンズ・ホプキンス大学の病院をつくるのに尽力した。ジョンズ・ホプキンス大学はクエーカー教徒の実業家Johns Hopkinsの遺産700万ドルによってボルチモアにつくら

れた。この大学は高度の水準の教育を目指し、初めてgraduate courseとundergraduate courseとを分け、米国における最初の真の大学とみなされている。

有名なGilmanが招かれて大学の運営に当たったが、Oslerは病院における臨床教育の重要性を強調し、学生時代から患者に接することを教えた。今日の医学教育の基本的な理念は彼に負うところ大である。

さて本文であるが、なるほどなかなか難しい。そのはじめに、Marcus Aurelius Antoninusの言葉を引用してある。

汝、海に屹立する崖になれかし、
 波は絶えず打ち砕けようと、
 崖は静かに聳え立ち、まわりの逆巻く波も穏やかに静まりぬ。

そして、今去らんとするペンシルバニア大学医学部の卒業生にこの趣旨を述べている。

「医師にとって、沈着な姿勢、これにまさる資質はありえない。」極めて印象的な訓示である。

Osler博士は、単に医学のみでなく、詩、哲学にも明るく、その方面に多くの友人を持っていたので、彼の言うところは、医師としての心掛けのみでなく、広く、人間としての心得を述べたものが多い。いきおい、やや難解なところもあるが、今日医療に数多くの問題を抱えている時代であればこそ、広く人間全体にかかわる立場から、落ち着いて眺めることが必要である。

本書が、わが国の医師、医学教育者によって、より深く考えられることを願ってやまない。

A 5 判 500 頁 写真 1 1983 年
 ￥ 3,800 ㊦ 400

医学書院 刊